
思ふのは誰の為？

夜叉の飄然 = 飄逸 = 縹緲！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思ふのは誰の為？

【コード】

N5098K

【作者名】

夜叉の飄然Ⅱ 瓢逸Ⅱ 縹紗！

【あらすじ】

銀時main短編小説集

初

はじめまして。

白夜叉と申します。

ただの短編小説集、

坂田銀時メインになるかも知れません。

色んな人の視点から

ま、良いとして、

どうぞ。

P・S・ 題名の思ふのは誰の為？なのですが、
思ふの‘ふ’がおかしいのでは？

と思った方がちらほらいらっしやると思います。

わかってる方もおられるでしょうが…

‘ふ’は、‘う’と読みます。

古文でも、‘ふ’は‘う’と読むでしょう？

‘ひ’は‘い’だったり。

分かりますかね？

とりあえず、言い替えれば、

思うのは誰の為？です。

長くてすみませんでした

歌舞伎町

俺の住む場所は、歌舞伎町と言う。

攘夷戦争が終結した後、江戸に上京してきた。

そしてスナックお登勢のババアに世話になって、今は万事屋を営んでる。

夜兔族の胃拡張娘と、地味なダメガネが万事屋メンバーに加わり、昔より一層賑やかになった。

昔の戦友と再会し、真選組という無粋な輩と出会う。

宙へ飛んでいった、頭がカラの野郎と今は過激派攘夷志士の、また出会う。

他にも、宇宙海賊春雨。

バカ皇子、ハム子、（あれ？公子？）

吉原の百華、頭、一の花魅。

色んな……色んな出会いが。

俺はこの江戸に、いや、歌舞伎町に来て、悔いなどない。

これからもどうなるか分からないが、楽しんで生きてやる。

幸せになれねえ事なんざとうに分かってる。

だから、今は、楽しんで生きてやる。

いいと思うだろ？

先生。

あとがき

.

歌舞伎町（後書き）

、
、
？

え？何これ？！え！！？何これエエ！！

歌舞伎町に来てから出会いの連続的な！？

そんな感じにしたかったんだけどなアア！！

視点、一応銀ちゃんです。

彼の背中

夜更けの巡回に、苛々しながらも、押さえるためにカチリとマヨネーズ型のライターに火を付け、煙草を吹かす。

吐いた煙は、空気に溶けてゆき、次第には姿を消した。

「とんだ嫌がらせだな、こりゃ」

まだ書類の整理も出来ちゃいねーのに。と軽く頭をかきながらふと足を止め、空を仰いだ。

望月 いや、満月か。

漆黒の空にポツンと浮かんでいる。

その柔げな色は、優しく江戸を包み、照らしている。

不思議だ、とポツリ呟いた。

「鬼の副長とも呼ばれる俺が、こんなこと思っなんぞ、……は。笑えるぜ」

鼻で笑い、再び足を進めた。

少し霧のかかり始めた視界に、目を細める。

あれは……

自分の目に、霧とは違い、はっきりとした白が見えた。

見覚えがある後ろ姿。

もう少し近寄り、様子を伺う。

どうやら、空を仰いでいるようだった。

「万事屋……か……?」

あの後ろ姿にピンと来たのだが、何かいまいち物足りない気がする。

そうか。

彼独特の雰囲気を漂わせていた気迫がない。

言えば。

隙だらけという事。

とりあえず、声をかけた。

「オイ」

短く声を出し、相手の返事を待った。

振り向くか、返事を返すかするだろうと思っていたが、反応はない。

その銀色の髪を夜風に遊ばされ、流水模様に入った彼の着流しは、ただ、規則正しく揺れている。

「オイ、万事屋」

二度目の呼び掛けにも反応を見せなかった。

かなり頭に来るものがあり、彼の肩を掴み、再度、二度目の言葉を発する。

「オイ、万事屋、聞いてんのか」

「……………」

肩を掴んでも反応を見せない。

顔は前髪に隠れ、見えない。

唯一見える口は、固く結ばれていた。

「……………平和だな」

彼が唐突に言葉を発した。

思っていた声より低く、感情などないように聞こえる。

「あ？てめー散々無視しといて何を」

「……………平和すぎるな」

自分の声を遮り、彼は続ける。

「そんなんでいいのかね……………俺は……………」

最後の聞いた事もない弱々しい彼の声に、咄嗟に肩を掴んでいた手を離した。

その背中には何を
(大事なもんさ)

その傷（前書き）

短いですがm（——）m

動乱篇後設定です（・（）ノ

その傷

「うッ…あ…?」

動くたびにズキリと痛む体に、眉を寄せながらも、体を起こした。

「あ、起きたんですか。
大丈夫です?土方さん」

聞き覚えのある声に、目を向けた。

万事屋んトコのカギだ。
新八って言ったか。

「ああ…お前何してんだ…?」

「あ…ああ、あの、銀さんの…治療してます…」

苦笑いを浮かべ、焦りのある言い方に、何かあるなと思った。

「……コイツ、俺以上に怪我してんじやないのか?」

「…ええ、まあ………」

「言え。何を隠してる」

新八の下で横になっている万事屋に目を向ける。

「……………!!」

十

これ以上無いくらいに目を見開いた。

未だ痛み続ける体を無理矢理動かし、万事屋のもとに行った。

「これは……………」

「……いつも、…手当てしてる時に思うんです…

一体、何の為に…」

万事屋の身体は、傷だらけだった。

この真選組の件の傷だけではない。

至る所に浅い傷や、刺され、縫われている所。

火傷したのか、そこだけ変色している所。

「……」

俺が以前、奴の左肩を斬った後。

絶句した。

「んなんだ…コレ…」

「……………銀さんに、僕がこれから言った事、言わないでくださいよね。」

「何だ……………？」

「銀さん……戦に出てたんです」

戦……………？

じよ、攘夷戦争…！？

「コイツ…参加して」

「絶対に、言わないでくださいよね。」

万事屋の身体に、包帯を巻き続ける。

「……………」

その傷の意味は
(護れなかった後さ)

END

あとがき

その傷（後書き）

もう私の小説やら短編やらほんつと中途半端っ！

銀さんの傷だらけの体が知られるのがいいな！と思い、作っただのがコレ。

土方が一番適役だった（ ）

不思議な（前書き）

攘夷戦争設定です＼（＾Ｏ＾）／

お楽しみあれ！

不思議な

「確か……ここじゃったかのう」

小さな紙切れを手に、うろつろと歩く一人の男。

かなり長身で、笠を被り、風呂敷に包んだ荷物を肩に結び付けていた。

何段もある階段を登り、見えてきた寺。

門の奥に見えるのが、紙切れに書いてある所だと思っただが…。

本当にこの場所なのだろうか？

一番に疑問なのは、見張りが一人も居ない事。不用心にも程がある。

二番目に、迎えくらい来てもよい筈なのだが……。

「困ったのう……」

わしア歓迎されてないんじやるか…

ちと寂しいぜよ

腕を組み、うーん、どうするかの…。と想い馳せていた時、何か
耳に入った。

「ぐう……」

「??」

何処から聞こえる寝息（だろうか？）に耳を澄ませた。

「……かぁ……」

寝息の聞こえる方に足を進ませ、門をくぐった。

「……！」

門に入るまで気付かなかった。

何と、門をくぐった所、即ち内側の壁で、寝ている男が居た。

壁に凭れかかり、胡坐をかいたまま寝ている。

「お？こりゃまたまっこと不思議な奴じゃー」

気配なんぞ微塵も出さずに寝ているのだ。

こんな事が出来るのかと疑いたくなるが、少し考えればわかる答えだった。

「ちゃんと寝てないみたいじゃのう……」

いつでも起きられるように……とでも言ったところかの。」

つまり、深くは眠っておらず、浅く寝ているのだ。

なら己に気付けよと言いたくなるが、恐らく殺気の無いものには反応する気は無いのだろう。

「おーい。おんしゃ、おきんけれ」

また珍しい銀髪をなびかせ、鼻提灯を作っている彼の額を、二、三回、ペチペチと叩いた。

「あー？」

漸く起きたかと、顔を覗きこめば、目は薄く開いており手はいつ間にやら頭を無造作にかいている。

ほんとに不思議な奴じゃー。と心で呟いた。

「……………ふああーあ…ッ」

銀髪の彼は、欠伸をし、ついでに背伸びを付け加え、此方に目をやった。

「あ？あー、来た来た。

土佐の藩の〜。

ヤベ、寝ちまった。あーツラがうるせーなア
また正座だなコレ」

「おんしゃ、誰がか？」

一人でブツブツと呟やいている男を首を傾け、問い掛けてきた。

「お、あんたを待ってたもんさ。

俺ア坂田銀時つてーんだ。

ま、よろしくたのまあ。」

そう言いながらすくつと立ち上がると、腰に刀を納め、歩き出した。

「こつちだ」

顎で合図をだした。

「おう。わしやあ坂本辰馬言つきに。

よろしくのお。」

「おー」

………やっぱ、何か不思議な奴じゃの。

一人笑みを浮かべると、銀時の背をおった。

(金時イ〜待つぜよ！)
(は？)

END
あとがき

不思議な（後書き）

次回は……

攘夷戦争時代です（*i*）

視点は土方だ！

白いやつ。(前書き)

ヒーツハアーツ!!!

連続更新なんだゾ(^3^)/

今回は私にしては結構長い)・(ノ

白いやつ。

パンツパンツ

竹刀の擦れ、激しく打ち合う音が道場に鳴り響く。

汗を滲んだ両手は、竹刀の柄を離さぬようにするので精一杯だった。落としたら負け。

負けず嫌いな己にまもっては、無くてはならないミスだ。

段々と押されていき、一步一步と、後退る。

その度に擦れる袴が気に食わなかったが、今はそんな事を気にしている場合ではない。

負けるわけにはいかない。

ましてや、己より年下のガキ等に。

荒い息遣いで、乾いている喉が嫌で、唾を飲み込んだ。

少しはマシになったが、そのせいで呼吸が更に苦しくなってしまった。

唾を飲み込む時間でさえ、己の肺は酸素をもとめていた。

次第に重くなつて行く足を無理矢理動かし、横に真つ直ぐ竹刀をふつた。

ソレを避けるため、相手は距離をとる。

「はあ、はあ、はあ」

己よりも息遣いが荒い相手を観察すれば、もうリミットだ。

後の一発がこの勝負の賭けだと、自ら足を踏みこみ飛び出した。

パンッ！

先程より一際大きな甲高い音がなり、一泊遅れて竹刀が地へ半円を描き、落ちた。

衝撃で一度跳ねるのを見れるほど、スローモーションに見えた。

「総悟の勝ち」

ドスの入った声がそう言い、張り詰めていた空気が、一気に溶け、周りのもの達が騒ぎだす。

己が負けた。

「うおおおお！すげーっ！」

「レベルのたっけえ！」

「俺たちじゃ適いそうもねえな！」

その声が五月蠅くて、一つ溜め息をついてから、道場を出た。

十

「……………」

長い長髪の髪を揺らしながら、屋根へ登った。

ここで風に当たるのも悪くはない。

汗もかき、丁度冷えて涼しくなるだろう。

はあ、と溜め息を漏らし、そこに寝転がった。

己が想像していた通り、涼しい。

何とも言えない満足感が、己を満たしていった。

……

「……っ？」

一瞬、何かの臭いが鼻をついた。

勢いよく起き上がり、立ち上がると、辺りを見回した。

この屋根はうちの町をかなり見渡せる。

小さな村なので、言えば、殆どが見えると言う方が正確なのかもしれないが。

「……あれは……」

何かが見えた。

赤い。紅い。色が、人が。

よくよく目を凝らして見てみれば、その白い人は、村の入り口付近に佇んでいる。

否、待ち伏せといったほうが正しい。

奥から、奇妙な異形の顔と体付きをしたもの達が、何百人とも言える群生を率いて、やってくるではないか。

「なっ……!?!」

あれは、?…噂に聞く天人……!?!

ならば、この町も危ないし、そもそも、あの男など言っただけでもない。

屋根からおり、廊下に立て掛けてあった刀を掴み、入り口まで走っ

た。

キン！カンツブシュザア！！ザ！ブチュブシヤア！！

聞き取れにくいですが確かに何やらの水音や、何かが飛び散る音、斬り裂く音。

聞いたことが無い。

若干、吐き気を覚えながらも、すぐ曲がる入り口へ走った。

ザアアア！！

角を曲がったと同時に、何かを斬る音がしたあと、もう何も音などしてこなくなった。

目の前に、白い男。
額に巻いている鉢巻をまた白い羽織りとともに
規則正しくなびかせる。

銀髪に血を浴び、白いと言った鉢巻と羽織りは、真っ赤。

ソレを見た途端に動けなくなった。

「
」

その銀髪の真っ赤な男は、此方に気付いた。

「……あーと……ここに住んでるモン？」

横顔が映っていた顔が、正面に映し出される。

血の滴る刀をしまいともせず、ただ握りしめていた。

さっきまでの大群は？

今更に気付く。

改めて銀髪の真っ赤な男から目を離し、辺りを見る。

死体死体死体。屍屍屍。死骸死骸死骸。

その中に、男は、ただたっていた。

あの何百人ともいえる群生に1人で立ち向かい、もうやり終えたというのか？

まさか。そんなはずが無い。

だが、周りには、ただの屍の山と、己と、血濡れた男のみ。

「嘘だろ？」

一番始めに出した声がソレだった。
いや、やっと出せたと言うところか。

「あ？何が？」

血濡れた男は、己が吐いた言葉を聞き返した。

「お前……こいつら全部……」

最後まで言いきれなかった。

腹から、何かがはい上がってくる感覚。

それはすぐに口へと運ばれ、生酸っぱい味が喉に感じ始める。

あ、吐く。

「 ……。」

血濡れた男は、その様子に気付いたのか、刀の血をふって払うと、左手に持っていた鞘に納め、此方に近寄ってきた。

やめろ。来るな。

その言葉に出したいが、今の状態では何も出来ない。

吐くわけにもいくまい。

必死に耐えながら男の様子を伺っていれば、己に近付き、背中に手をのせた。

「 ツー!? 」

反応はしたが、この口を押さえてる両手を動かされぬ今、反抗など出来なかった。

何をされるんだと冷や汗をかき、片目で見ろ。

だがソイツは、己の予想を反して、背中を擦り始めた。

「ワリーな。んなもん見せちまってよ。」

この町にや、こんなことは起こらないから多分、見んの初めて何だろ？

ワリー。お前さんの町が狙われるって聞いて、一人飛び出してずつと入り口で立ち往生してたわけよ。

案の定、このざまってところかねえ。」

苦笑いを浮かべる。

「で？さっきの質問何なわけ？」

もう大分引いたのが分かったのか、再度聞き返してきた。

「……てめー一人で、ソイツ等全部……やったのか？」

「へへッ。俺ア銀時。坂田銀時だ。

ま、仲良くしてくれよ。」

右手を上げ、笑みを溢す。

「……お前…攘夷志士か？」

己の突然の問い掛けにポカンとし、ああ、と声を出した。

「そうだな。………！」

「！」

彼の目が、突然煌めいた。

眉を寄せ、目を細くすると、目から光が放たれた。

シュッ

鞘から刀を抜くと、瞬時に動いていた。

目の前にいる彼が、残像だと気付いたのは、己の隣に彼がいるのが

分かってから。

「
」!

彼に振り向けば、また残像があった。

ドスッ!

何かを突き刺す音がすぐ近くでしたのがわかった。

そこに目をやれば、異形の顔と体付きをした天人の頭を刀が一突きに刺さっていた。

その刀を所持しているのは、勿論先程の男。

坂田銀時。

「白夜叉アアア!」

「覚悟！」

また後ろから次々と溢れだした天人。

だが、そこに銀時はいない。

「何の覚悟だ？」

唐突に聞こえた声に、また目を向ける。

天人の背後に立つ、銀時。

何時の間にも？

また鮮血が舞った。

強い。

己よりも強い。

総悟さえ、差があるだろう。

畜生。

「白夜叉。」

「？」

唐突に、銀時が口を開いた。

そういえば…さっきの天人もそんな事言ってたな。

だが、聞いた事がある。

「それが、俺のもう一つの名前。怖いか？」

その男 銀色の髪に血を浴び

戦場を駆る姿はまさしく

夜叉。

思い出した。

風の噂で耳にした事がある。

敵は愚か、味方からも恐れられた伝説の武神 白夜叉。

「 こんな所でお目にかかるたあな。」

そう言えば銀時は、あ？知ってんの？と、さも珍しいとでも言いそ
うな顔をしている。

「そーかいそーかい。」

いやー、こんな田舎の町にも、そんな噂が流れてたなんてなー。

ん？ひよつとして銀さん有名になった感じ？

やば、なんか嬉しー！」

おお！と声をあげ、一人でテンションが上がっている相手を見て、保たれた。

「…………お前…強いのか？」

「ん？俺？」

強いぜ」

口端を吊り上げ、ソイツは笑みを浮かべた。

「ツチ」

舌打ちをすると、踵を返した。

「じゃーな。さっさと死んじまえよ」

「おう。その願いは受けられねーが反対に生きてやる事は出来るぜ。

強くなれ」

俺は振りかえる事無く、そこを去った。

十

：

「トシ、どこ行ってたんだ？」

道場に帰るなり、近藤さんが話し掛けてきた。

「別に」

素っ気なく返し、縁側に座った。

「誰かに会ってたのか？」

「……………そんな所だ。」

また会いそうな気がする。

(どんな奴？男？)
(白いやつ。男)

いつの間にか(前書き)

銀時と桂の会話!!

いつの間

し　　…ん、とした町。

まあ、こんな時間帯じゃ当たり前か。

ふ、と鼻で笑い、苦笑いを浮かべた。

首にマフラーを巻き付け、バサツと羽織りをかぶると、ガラガラと戸を開けた。

吐いた息が白く染まり、虚空へ溶けるように消えていく。

そういえば寝てる奴がいるんだった。

今度は静かに戸を閉める。

「…おー…さみイ……」

嫌だねえほんと。誰に言っているんだと内心思いつつ悪態をつく。

ヒンヤリとした自分の両手を、両袖の中に入れ、暖める。

ふうーっと息を吐いてから、カツンカツンと階段を下り、ある場所に向かった。

「ちゃーっす」

暖簾をくぐり、軽い気持ちで挨拶を交わした。

「おお！銀さんじゃねーか！
久しいねえ、最近来てなかったろ？」

「色々あってねえ…」

俺は暇じゃないの」

「またまたあ、嘘言っちゃいかんよ！」

「うっせんじゃハゲ」

「どうせ万事屋はガラガラ何だろ？」

そんなんじゃないよ？

最近の奴らはほんと、楽にしようとしやがる」

「今の無視かコラ

つか さり気なく俺に文句言ってるよね」

「あーダメだダメ。

若いのはダメだねえー！」

「てめー頭、残りの栄光をむしり取ってやるーか」

居酒屋。

銀時の行く予定だった場所である。

最近来ていなかったのは、会話を聞いていて分かる。

そしてもう一人の客。

「栄光じゃない桂だ。」

「わかったわ、おめーもむしり取ってほしいんだな」

「何を言う、俺はハゲとらんぞ」

「その発言でおやっさんがハゲてると言ってるようなもんだよね

桂くん^くに拍手」

パチパチ

軽く手を叩いて拍手する。

もう一人の客、それはお分りの穏健派攘夷志士、桂 小太郎である。

「カッーラさん今日の勘定二倍ね」

「待ってくれエエエッ!!!!!!」

「プッカのどこをどうやったらグッチョになるんだよっ！
明らかに矛盾してるだろーが！」

「して、銀時」

「切り替え早っ

何だよ

居酒屋の椅子に座り、おやっさん白酒。と言い、桂に返事を返した。

「最近、調子はどつだっ？」

「は？」

桂の口から出た言葉に素っ頓狂な声をあげる。

「ま、その様子じゃあ…悪くは無いみたいだな。」

「どう見たら悪く無いように見えんだよ

もう家計が火の車だぞ？

毎日卵掛けご飯だがその内ふりかけご飯になるぞ？」

「大丈夫だ」

「意味分かんねえよっ！」

全く噛み合っていない会話に痺れを切らして立ち上がり怒鳴り付けた。

「まだわからんか？」

「だから分かんねえつつてんだろーが！」

「もう昔見たいな想いはしていないな、と言っているんだ。」

「」

いつもの口調で軽く言うその言葉は、どこか真剣さを浴びていて、立ち上がった体を、ドスンと下ろした。

いつの間にか置いてあった白酒を、猪口に入れ、くいっと煽る。

「今更何を心配してんだ…」

ポリポリと頭を無造作に掻きまじり、猪口をコトコトとおく。

「気にすんな …

もう、失くしゃしねーよ」

「……………」

「もうこんなご時世なんだ、

互いに殺しあつたりはもうしねえ」

そうか、コイツはこんな事を考えていたのか。

「そうか……お前が何も無いなら俺はもう何も言つまい。」

「……………」

ツラア

「何だ？」

突っ込まないのかと内心思う。

「あのペンギンお化けいるだろ」

「ペンギンお化けじゃないエリザベスだ」

自分の名前は突っ込まないでソレは突っ込むんかい。
呆れるように息を吐いてから、話を戻した。

「——っ選べ」

そのエリザベスと共に江戸の夜明けを見るため、真選組や、天人と戦い続けるか。

それとも、天人と共生し、それでも幸せに暮らしていくか。」

お前なら どっちだ？

目で桂に言う。

「……………」

桂は暫く考える素振りをしてから、またゆっくり目を合わせた。

「俺なら、三つ目のわからないかな。」

「はっ、言つと思つたぜ。勝手に三つ目作りやがって…

そつだな、わからないが正解だろうな。」

へっ、と笑い飛ばして席を立った。

「どう暮らすなんざ、わからねえし、分かりゃ面白くねえ

そついうもんなんだよ人生

だから楽しみがあるつてもんよ」

おやつさんじゃあな。

と言い、暖簾をくぐり、店から出る。

「もう行くのか?」

その問い掛けに、振り返って微笑みで返す。

「……………そうか」

いつの間に大きくなったんだろうな…お前は。

きつとその背に 多くの物を抱え込んでいるだろう。

とどまる事を知らずに、また一つ、また一つと増えて、重みを増していった。

大丈夫だろう、お前なら。

俺の心配は、無用だったようだ。

苦笑いを浮かべた。

（カツーラさんお勘定）

（ああ、銀時のやつ、勘定払って無いではないかっ！）

いつの間に(後書き)

わぁーい(「、、」)

描写下手バンザイ(^O^) /

何が言いたいんだチキショー () (クラァッ!!)

……では。

答え（前書き）

いやあ、心の闇の深さとはを更新したいんだけどね

描写難しくて先に進めない（、、）

さすがにそれは不味いかなあと思ったので、ホームページでアップした短編を投稿してみるm（——）m

私のホームページ見たい方は私のマイページで、もっと見るをクリックしたら、

紅く儂く咲けよ銀色でリンクあると思います（、、#）

それでは、短編っ！

W 銀時と桂の会話。攘夷時代と違ってくれて構いませんぜw（。O。（

答え

綺麗羅り。鋭く、刀身が光る。じわりじわりと、胸が苦しくなる。この気持ちは何だったか。分からない。虚空から湧き出るこの想いの名は？

誰か、答えるよ。

分からねーんだよ。

ゆらりゆらりと、体が揺れる。頭がフラフラして上手くバランスが取れない。どこか頭でも打ったっけ。

なあ、俺どうしたんだっけ。

分からねーんだよ。

なあ……。

「銀時？……！貴様っ」

聞き覚えのある声が耳に届くが、頭がぼんやりとして反応が出来ない。する気力がないと言っても、あながち間違いではなかった。

突然に、頭をがっつと鷲掴みにされ、髪を引っ張られる。どうやら頭を起こされたようだ。だが、何の反応も出来なく、ただされるがままだった。

「橋から落ちるところだったぞ。何がしたいんだ、刀何ぞ持って」

聞き覚えのある声　桂の問いに、俺は上手く回らない脳で思考を巡らせる。今、いるのは橋。俺は手摺りに寄り掛って落ちそうになっていたらしい。何故か右手には刀が握られていた。

「……わからん」

「はあ？貴様、寝ていなければいけないだろう。天人から薬物を打たれたのを覚えていないのか」

ゆっくりと、ゆったりと、首が据わっていない頭をあげる。桂に目を向け、一度瞬きをした。何かを言おうとしたが忘れてしまったので暫く沈黙が辺りを包む。元々、深夜だから人一人っ子いやしないため、静寂なところだったが。

「…………ツラア…………」

「なんだ」

酷くゆっくりと、言葉を発する俺。天人に薬物打たれたんだっけ。だからこんなにダリイのか。今更ながらに思っ、再度俺は口を開く。

「人ってーのはあ……………難しい……………よなあ……………」

「……………？お前が言いたいのかはわからんが、そうだな」

「……………何よりも強エ奴がよオ……………なんで……………こつもお……………脆いのかねえ……………」

力が全く入らない両手で、橋に刀を突き刺す。正直一人で立っているのは奇跡だと言える。ザクツと音を立てて垂直に突き刺さった。

「……………そうだな」

桂が静かにそう言い、沈黙を守る。俺はいつもより更に半開きの目を下に向ける事によって目を閉じた。

「忘れた」

「……………なに？」

先ほどからの語尾が伸びる喋り方から打って代わり、酷く淡々な物言いに、桂は微かに眉を寄せた。

「ぢぢぢって……泣くんだったか」

顔をゆっくりと、開いた。

(答えを求めも)
ただ静かに

(そこに答えはない)
沈黙を守るだけ

E
N
D

答え（後書き）

わけ分からんよね（、、（

なんか唐突に思いついたんだよジョニー。褒めてくれ。

といつことで心の闇の深さ

頑張りますm（——（ m

笑ってるよバーカ(前書き)

銀時+坂本 真選組

坂本がキャラ崩壊してるかも shouldn't (、、)

笑ってるよバーカ

ずり、と鈍く光る黒い厚底のブーツが、地面を擦る。意味もなく頭をわしゃわしゃと掻いて、懐に左腕を入れた。

「ふあああー」

お天道様がサンサンと降り注ぐ万事屋の前で、大きな欠伸を一つ。大袈裟に口を開いて空を仰いだ。

「暇だ」

眠そうな半開きの目で（とつかいつもそうだが）流れる雲をただ眺める。その時だった。

暫く上を見ていたため首が悲鳴をあげそうな、つりそうな状態に近づいてきていたのを感じたので、ふう、と一息ついて下に顔を向けた時。

茶髪のくりんくりんで見事にモジャモジャの毛玉が、視界に入った。一瞬人違いかとも考えたが、こんな頭は他にはないと勝手に納得し

た。

毛玉は、どうやら下のババアの店から出た所だったようで、キヨロキヨロと辺りを見回していた。たまにチカチカと日光に反射して光る丸いサングラスを鬱陶しく思いながら、手摺りに右腕をかけた。

「オーイ、坂本」

俺の声に反応して毛玉が、一瞬ピクリと微かに停止する。するとまた更に、激しくキヨロキヨロ……というよりは、もうブンブンと頭をふりながら辺りを見回している。どうやら、俺がどこにいるかはわかっていないようだ。

「上だ上ーっバーバーカ」

ついでに文句も付け足して坂本を再度呼び掛けると、は、と坂本は遂に上へと顔を向けた。ハタから見ても分かるほど、ぱあっと満面の笑みになる。

「金時イイ！探したぜよー！何でそんな所にいるがかー！せめて地面におってほしかったきにー！」

「いやいや無理だからね。俺にお前はサンドイッチのハムになれと

でも言いてーのか。つかお前が馬鹿なだけだろうが、どーせまた万事屋金ちゃんはどこにあるかしつとるがか？とか聞いてたんだろーけどよ」

「アレエ！この看板は万事屋銀ちゃんって書いてるきに！」

「おっやつと分かってくれたか！」

「誰じゃあー！金に良て書いたんはー！」

「元々金じゃねーって事に気がつけエエエエ！お前はなんでそんなのホント！つか俺だけじゃねー？名前間違えられてるの俺だけじゃねー？」

「きーんーとーきーっ！」

「だあああつ！うるせえうるせえ！！銀だっつってんだろっつがアアアアアアアア！」

頭を抱えて叫ぶ叫ぶ。相変わらず全くと言っていいほど変わらないかつての戦友に大きなため息が出た。先ほどまで暇だとか呟いて、欠伸をしていた自分が嘘のようだ。

とりあえず、あまりに五月蠅くするとババアから罵声が来る事は予想出来ているので、無理矢理にでも坂本を万事屋に押し込んだ。

「アレ、あの子供らはおらんがか？」

「あー、アレだ。今、旅行行ってる」

俺は面倒くさかったので行く気など更々なく、妙と三人でいかせた。俺は万事屋で一人留守番中である。暇なわけだ。

「んで、お前は一体何のようよ」

ソファーにドスツと荒々しく腰を下ろし、改めて坂本に問いかける。坂本もソファーに腰を下ろした。

「実はのう……真剣な話なんじゃが」

「おうおう。珍しく真剣マッな顔になっちゃって。何だよ」

「快援隊にの……間者が居たらしくてのう。……皆が皆、お互いを

疑い始めたんじゃ。のう銀時……わしはどうしたらええかわからん
ぜよ」

丸いサングラスを外して、伏せている目をこちらに向け、俺と目を
かち合わせる。ゆらゆらと揺れるその目が、あからさまな動揺と、
微かに伺える哀しみが見て取れた。

「オメーはどうなんだよ」

「わしかや？」

「まず人の意見より、自分で答えを出さねーといけねェだろ」

俺の言葉に、坂本は再び目を伏せる。こんな事が今まで無かった分、
不安や心配が大きいのだろつ。ここまで落ち込んでいる坂本を見た
のは昔以来だった。

「……、わしは……皆を安心させたいんじやがのつ」

「ならそれでいいじゃん」

「え？」

あまりに唐突だった俺の答えに坂本は露骨に目を丸くした。

「何を深く考える必要があんだよ。あの快援隊の頭は誰だ。お前しかいねーだろ。いつもみてーに馬鹿みたいに笑って、馬鹿みたいに笑いあって、馬鹿みたいに死ぬほど笑って過ごせば、いいだろ。そりやお前がんな辛気くせー顔してたら、他の奴らも不安がるだろうよ」

俺がため息混じりにそう言って足を組めば、坂本はきよんとした顔をして暫し放心する。その後。

「……………あは……………あは、アハハハハ！アハハハハハ！！」

何か大事な物を思い出したかのように、口から零れだした声。ついで何かに吹っ切れたように、大声で笑い始めた。

「そうか……………そうじゃのう！アハハハハハ！」

坂本は頭に手をやっていつものように陽気に笑う。何かを取り戻したように、思い出したかのように。

そんな坂本にふつと笑うと、よしっ、と声を上げる。

「飲みに行くぞ！坂本！生ける財布！」

「アハハハハ！……泣いていい？」

生ける財布こと坂本を無理矢理連れ、居酒屋へと足を進める。久々の酒に意気揚々と肩を組んだ。

「ちゃーっす」

「アハハハハハ！」

居酒屋の暖簾を潜り、中へ足を踏み入れる。すると、見慣れた連中が視界に入った。

「げ」

「オイ、てめー。誰のツラみてんな声、発していやがる」

何とまた真選組の連中であつた。俺が露骨に嫌な顔をすれば、土方がまた同じように眉間に皺をよせる。

「旦那ア、奇遇ですねエ」

「よっ！万事屋！」

続いて沖田と近藤が声をあげ、挨拶をする。俺は内心最悪だなんて悪態をつきながら、軽く返した。

暫く、坂本と世話話を延々と続け、真選組とはちよこちよこと他愛ない話をする。だがしかし、久しぶりの酒であつて、豪快に飲み過ぎたのか（お金の心配もないためもある）、唐突に吐き気に襲われた。

「うっぷ……。ういゝ、さ、坂本お俺ちよっくらコイツを始末しに……うっぷう」

「アハハハハ！相変わらず金時は酒に弱いもう！行ってこい行ってこい、アハハハハ！！」

坂本の鬱陶しい笑いに更に吐き気といらだち、その他毛玉などに襲

われ、急いで覚束ない足取りで居酒屋を出た。

「ときに坂本殿！万事屋とはどういう関係なんですか？」

銀時が居酒屋を出た後、あまり飲んでいない近藤が坂本に問いかける。興味があるのか、土方や沖田も坂本に目を向けた。

「んー、難しい質問じゃの……。金時とわしの関係かや？そうじゃのう……敢えて言うなら、戦友じゃき。おんしらはどうなんじゃ？」

「俺か？俺たちは、まあ腐れ縁だな！」

「オイちよつと待て。今坂本さん、アンタから凄い言葉が聞こえたぞ……？」

「戦友……って、どういう意味ですかイ？」

近藤は大して気にしなかったようだが、坂本の戦友という怪しい単語に土方と沖田は過敏に反応する。

「そのまんまの意味じゃ。共に戦った仲間ぜよ。あんまり深くは言

えんき。金時は過去を語らん男での、わしが言っている話じゃないき。でも」

くいつと酒を煽ったあと、坂本はサングラスの奥に隠れる目を光らせた。

「ちくつとだけなら、いいかの」

すつと、口角を上げた。

金時と最初に会った時はのう……そうじゃな。本当に不思議なヤツじゃった。

まわりと比べて偉く飄々として、雲のように掴みどころがなくて、猫のようにのんびりとしたよく分からん男じゃった。

わしが最初に聞いた声は欠伸じゃった。どうじゃ？よく分からんじやる？アハハハ！でも、わしはヤツのそういうところに興味を持って、惹かれたのかもしれない。

でも、わしは宇宙そいつに憧れておつてな。もしかしたら、この宇宙そいつで、平和のきっかけを作れるかもしれない、そう思ったんじゃ。そしてわしは決めた。

でも、どうしても、金時に一緒に来て貰いたくてのう、誘ったんじやが……結果がこれじゃのう。

ヤツはデカイ男じゃ。きつと、これから困難が待ち受けていようとも、ヤツは怯む事は絶対にならない。そして、死ぬいう事も、仲間を見捨てるいう事も、誰かを死なすいう事も、絶対にならない。

口ではああ言うつヤツじゃが、本心は何を思うとるんかは、わしにもわからんぜよ。じゃが、きつと大切な事を、ヤツは教えてくれるはずじゃ。わしは、昔言われた言葉が今も忘れられんぜよ。

お、金時が戻って来たようじゃの。この話はもう終いじゃ。長くなつて悪かったの。けど、忘れたらいかんぜよ。

『俺か？そうさなア、俺アのんびり地球ちきうで、釣糸つりいとたらずさ。地べた
落っこちた流れ星でも釣り上げて、もっぺん宙そらにリリースよ』

何言ってんだよ。お前は

(変なこと聞くなよ)

いつもみてーに笑ってる

(お前らしく、だろ?)

END

夢幻（前書き）

銀さんと桂です。

言いたい事を言い切った！

夢幻

酷く、静かだ。酒を注ぐ水音と、机に置く猪口の音だけがただ響いていた。

静寂がただ万事屋に響く中、桂がふうと短く息を吐いた。

「……銀時」

「ああ？」

桂の問いかけに、銀時は酒を一気に飲み干してから、怠そうに返事を返す。

「……お前なら、斬るか？」

何を、とは聞かない。聞くまでもなくそれはかつて共に戦った馴染みのものだと分かっているからだ。

「斬る」

とん、と机に猪口を置いてから、ただ一言。そう言い放つ。その一言にどれほどの覚悟と想いが重なっているかを、知るものは一体何人いるのだろうか。

「 そうだな、聞くまでもない。……俺はまだ躊躇っているようだ かつて共に戦った仲間を、この手で斬る……という事に」

チャキ、と左手で静かに鯉口を切る。鞘から少し覗いた刀身は、月に照らされ淡く煌めいた。

「 ……お前は、 躊躇わないのか」

刀から手を離してから、銀時を見据える。銀時は猪口に入った酒に目を向けていた。

「 俺アな、 たまにこんな夢を見るんだ」

ゆっくりと目を閉じ、思いだすかのように言葉を綴る。

「どこが前だかわからねエ暗がりを、ただ走って……どこにあるかわからねエ光を、ただ追い求めてひたすら先頭切って走ってた」

桂は、ただ黙って銀時話を聞く。

「何かに躓いてこけて、それが屍でも、何かに呼ばれて振り返って、そこに見えるのはただの屍でも、俺は、ずっと光を探してた」

「だが、たまに……暖かいような冷たいようなそんな光が、暗がりの中で垣間見るんだ」

「それに手エ伸ばしても、全然届かねエほど遠くにある光で、走り続けて重くなった足を動かして、近づいた」

「掴める、そう思って光にもつかい、手エ伸ばした」

くいつと猪口を傾ける。

「……簡単に、手から擦り抜けた」

とん、と猪口を置く。

「最初は何かの間違いだと思って、また、手エ伸ばした。……同じ

ようにまた擦り抜けた」

「絶望した、俺がずっと追い求めてた光が、ただの掴めねエ幻だったってな」

「じゃあ何のために走ってた？そう自分自身に問いかけて、目の前にある光を見つめてた」

「　　けど気付いた。幻なら、なんでこんな暖けエんだってな。…
…ただ、その光に何かを怖れて、俺自身が避けてたんじゃねエのか、
そう思いはじめた」

「何を怖れてんのか　さっぱりわからなかった。そんなときだ、声
が聞こえたんだ、どこからともなく　　あの人の声が」

ごくりと、桂が生唾を飲み込んだのが分かった。

「《お前は、何かを忘れていませんか》。確かに、そう言ったのが
聞こえた。けど、何を忘れていいのかわからなかった」

「でも、少し考えれば分かった。 あいつらを、すっかり忘れていたんだ」

「ずっとずっと……俺を支えていた、生意気なガキ二人を 家族を、忘れていた」

「少し考えれば気付いたことだったのに、俺は考えることすらしねーで、ただ自分のこと^{てめー}だけ考えてて……」

「きつと俺は、光を掴んだ先にあるあいつらのいねエ世界を怖れてた……っつーことに気付いた」

「護るだア何だア抜かしてたくせに……最終的には一番自分が可愛^{てめー}いんだつて、自分を殺したくなつた」

「そんなときに光のことなんざ忘れて俺は、今までひたすら走つてきた暗がりに戻つて、あいつらの名前叫んで　今度は光じゃなくあいつらを探した」

「そしたら、すぐそこにいったんだ、あいつらが。生意気なガキ一人だけじゃなく、他にも腐れ縁の奴らが……」

「こんなにすぐ近くにいた」

「今度こそ、こいつらと一瞬に光へ行こう。そう思った時だ」

「離れたところに一人……、アイツがいた」

「こっちに背中見せて、誰とも関わろうとしねーで、一人そこにいた」

「ソイツからただひしひしと感じたのは、狂気と憎悪と 孤独。
狂気に従いすぎて、憎悪を生み出しすぎて……後に引けなくなった、
孤独になっちまった、アイツがいた」

「アイツはわかってたはずだった。こんなことしても誰も喜ばねエ、
こんなことしても、何にもならねエことくらい」

「ほんとは、ただあの人が好きで、生意気なチビなだけなのに」

「そこでわかつちまった。……アイツは、もう戻れねえんだってな。きっと俺が手エ伸ばしても、アイツは手じゃなく、刀を向ける」

「それが分かっているからこそ俺は、アイツに刀を向けられれば、俺もアイツに刀を向ける」

「アイツには、もう言葉は通じねエ。だから、刀で通じなきゃアならねエ　もうそれ以外の方法はねエからだ」

「さっき躊躇わないのかって聞いたな？　躊躇わねーよ。躊躇う暇があんなら、アイツにチビの一つでもからかいやがれ」

「この夢の最後は、きっとアイツの片がついて、続きが見れんだろ。どうなるかは知らねーけどな」

言って、頭をがしがしと搔く。酒を猪口に注いで、もう言う事はな
いとばかりに猪口を傾けた。

「ほんとに、お前の考えていることはよく分からん」

「悪かったな」

「いや、俺は羨ましいんだ、お前が」

「……」

桂がフツと微かに笑って猪口を煽ると、銀時が眉間に皺を寄せる。

「きつと皆そつだ。何かに迷った時、お前の言葉を待っている。確かに真っ直ぐな、お前の言葉を」

「……何言ってるんだツラ」

「ツラじゃない桂だ」

信じているからさ

(魂の籠もった言葉を)

確かに真っ直ぐなお前を

(何にも曲がらないお前を)

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5098k/>

思ふのは誰の為？

2011年11月18日03時52分発行